

追悼特集

forever

丹羽靱負 医学博士**アトピー、膠原病、
がん、難病****副作用のない
生薬開発に捧げた
医師人生****日本
SOD
研究会報**

発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川1-15-2 B棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

去る2022年9月18日、丹羽靱負先生がご逝去されました。享年89歳。

「90歳のお誕生日は盛大に」と言っていたのが亡くなられる数ヶ月前のことでした。おそろく眠るように安らかに逝かれたことと思います。

今回は、これまで20年近く丹羽先生に取材させていただいたこの会報で、丹羽先生の輝かしい功績や情熱をお伝えできればと思います。

まず、先生の人生から紐解いていきましょう。

1932年(昭和7年)丹羽家の三男、末っ子として大阪に生まれました。お父様は銀行マンから始まり、鉱山開発、漁業ビジネス、石油の卸業など転々としながらもすべて成功に導いたやり手で、破天荒な人だったと

言います。お母様は明治政府を支え、憲法立案の立役者だった東大卒の父親を持つ官僚の家に生まれたお嬢様。お手伝いさんがいるくらい、当時としては裕福な家に生まれた丹羽先生でしたが、子供の頃は虚弱体質で、小学校も登校する度に熱を出して欠席ばかりだったと言います。運動会でも同級生より半周遅れでゴールするくらい弱かったです。そうです。そんな体質を改善してくれたのは、ペットの犬や猫でした。晩年も自分の飼った猫だけでなく、近所の野良猫にまで餌をあげるくらい命あるものの、生き物を大切にしていました。

1950年に京都大学医学部に進学。京都大学と言えば、東大と並びノーベル賞受賞者など著名な研究者を数多く輩出している大学です。そんな

な校風の中、先生は、人の命に関わる医師としての使命と同時に、病理の研究にも没頭したと言います。虚弱体質で外遊びよりもひとり家で本を読むことに興味を持っていた少年が、研究に没頭したのもうなずけます。現に、インターン時代から物置小屋を研究室に改造して、昼間は診察、夜は研究の日々だったとか。それは、大学を卒業しても変わりませんでした。京都大学付属病院で昼間は診察。夜は研究。そんなことを繰り返してとうとう体調を崩してしまい、病院から休養療養、つまり、田舎の病院でのんびりと仕事をしなさい、と勧められました。場所が高知県の最南端、土佐清水市にある貝ノ川という所でした。それが後に土佐清水という地に拠点を構えることとなったのです。

1974年11月、土佐清水市からの要請で土佐清水病院を開院。院長として地域の人たちの診療を始めました。空気のきれいな土地で生活するうちにすっかり健康を取り戻し、大好きな研究もはかどったと言います。当時から先生が研究していたのは、今も難病とされている膠原病の一種、SLE（全身性エリテマトーデス）、ベーチエット病やアトピー性皮膚炎（アトピーと略）などでした。それらの論文は海外でも紹介され、アメリカのイリノイ大学から研究員として招かれたのです。半年間でしたが、そこで学んだ好中球（※注1参照）研究がヒントになり、帰国後に書いた「活性炭素とスカベンジャー（除活性炭素）」の論文が国際医学誌などにも取り上げられ、国内外に認められたのです。丹羽先生の名

前は一躍、世間に広がり、土佐清水病院には全国から患者さんが詰めかけるようになりました。時は日本が高度経済成長の真っ只中。先生は昼間は診療、夜は研究に没頭する日々。世界の医学者らと連携をとりながら、活性炭素を除去する抗酸化剤の開発研究や国際医学雑誌への投稿論文の審査員（20年務める）や、学会に論文を発表する日々でした。

白血病で亡くなった

愛児の死

抗がん剤治療の地獄

そんな時でした。8歳になるご子息、剛士さんが急性骨髄性白血病という血液のがんに蝕まれたのです。今から40年も前、小児の白血病治療法は確立されておらず、ほとんど助からない

病だったそうです。今でも小児の長期生存率は60〜70%だとか。（国立成育医療研究センターHPより）医者である丹羽先生は、我が子の命があと1、2年ということはもちろん分かっていました。それでも奇跡が起こるかもしれない、最新の抗がん剤が劇的に効くかもしれない、と神に祈ったそうです。残念ながらその願いは叶わず、息子さんは9歳という短い生涯を閉じました。その時の先生の慟哭は如何ばかりだったでしょうか。一時は医師を辞めようと考え真剣に考えていたと言います。

丹羽先生はこのときの体験、後悔と懺悔の気持ちを『白血病の息子が教えてくれた医者的心』という著書に残しています。そして、全国に診療所を設け、診療や講演会を行ってきました。その中のひとつ、丹羽メディ



カル研究所の主催で行った講演の中でも、ご子息の死がきっかけで、SOD開発、生薬からなる制がん剤の開発が始まったとおっしゃっています。

「当時は抗がん剤治療しか方法がなかった。しかし、確かに抗がん剤はがんをやっつけるが、同時に人間の健康な細胞も殺してしまう。人間よりも、がん細胞のほうが圧

倒的に強いから、がんが死ぬより人間のほうが先に死んでしまう。

そんなことは分かっていたけれど、大学でもこれしか教えてくれなかった。教科書にもこれしか書いてない。何百人ものがん患者さんが抗がん剤で亡くなって

いくのを見届けるしかなかったんです」

まさか、自分の子供が同じことになるとは思いませんでした。

著書の中で先生はこのように語っています。

「抗がん剤の副作用で我が子が苦しみ抜くという、この世の凄惨な地獄を体験しました。医師として、父親として、血の通った人間として味わった息子との死別の悲しみ。特に末期のがんに苦しみ抜いた我が子の体験から、患者側に立たされて初めてわかったこと、後悔の念。過去、

同じ運命で同様に苦しみ悲しんで亡くなられた患者さんとその肉親の方々へ申し訳ないことをしていただけだと思います。

私には超能力もなければテレパシーもありません。私にでき

ることは我が子が病気で苦しむ抜いたような悲しみが、なんとかこの世でなくなるように努力するだけです。日曜祭日、盆、正月も一切捨てて、難病やがんの研究に取り組むことによって、息子が副作用で苦しんだ恐ろしい化学薬品ではない、副作用のない天然の生薬の開発を進める事と、患者さんの心になって行う日常の診療だけです」

あの日から、丹羽先生は20年以上、副作用のない生薬による制がん剤の開発に没頭しました。ブランド品を買うわけではなく、接待や宴会に行くわけでもなく、ゴルフのルールさえ知らない。そんなことよりも、がんで苦しんで亡くなっていく何十万人もの気の毒な患者さんをひとりでも減らすことが使命だと。

「1970年代以降、地球が変わった。環境汚染がどんどんひどくなつたのです。と同時にがん、膠原病、アトピーなど難病の患者さんが激増しました。車の排気ガスに含まれる窒素酸化物、重油を焚く工場から排出される窒素化合物やオゾン層を破壊するフロンガスによる紫外線量の増加。加えて農薬の散布、抗生物質や成長促進剤という人工ホルモンを投与された牛肉や豚肉の摂取。これらは毒性

がん、膠原病、アトピーを始

では、その活性酸素を除去するにはどうすればいいのか。抗がん剤に代わるがんの治療法はあるのか。

「抗がん剤は人間を苦しませて死なせるだけ。かと言って、がんに効くと謳っている漢方、健康食品は、ほうきで掃いて捨てるほどあるが、どれも末期がんの患者さんには全く効かない。

20年余りの研究のなかで導き出した答えのひとつがSOD様作用食品などでした。使用している原材料は大豆、米糠、ハト麦、小麦、小麦胚芽、ごま、抹茶、麹などです。

「そこらへんで安く買えるものばかりで、原材料と言われるとお恥ずかしいばかりですが、私
のものは加工法が違うんです」
（詳しい加工法等は著書『がん治療究極の選択』に記してあります）

活性酸素を除去するのにSODなどの体内にある酵素が効果的なことは分かっていますが、その酵素を生薬から作って摂取してもほとんどが吸収されないと言います。先生の研究でそのこと

が分かり、それを独自の製法で吸収されるように開発したのがSODであり、がん治療に使われている制がん剤でした。制がん剤の生薬は、冬虫夏草、ビワ、アガリクス、茯苓、牛黄、大黃、チャーガ、山伏茸、鹿角靈芝など多種類に渡っています。これらを遠赤外線焙煎、麴発酵、油剤化という加工過程を経て初めて独自の生薬となります。

抗がん剤で

苦しむことがない

丹羽療法で延命世界一

「私の病院には、がんセンターや大学病院で余命3ヶ月から半年といわれ、抗がん剤の副作用で吐き気嘔吐を繰り返し、もうこんな苦しい抗がん剤はいやだ、と来られる方、医者からもう治療法がないです、ホスピス

に行ってくださいと言われた方が多いです。あとは膠原病などの難病やひどいアトピーの患者さん」



先生は講演会や取材の場で、何度も何度も言っていました。「病気の90%は薬では治らないんです。効いたと思った薬には

副作用があるんです。これが西洋医学の限界なんです」

先生の開発した生薬の制がん剤は、がんそのものを叩くのではなく、人間の身体ががんを抑えられるように、人間が本来持っているはずの免疫力を強力に高める作用なのです。免疫を高めるといって、昨今コロナ禍で納豆などの

抗酸化食品を摂るように言っていますが、確かに健康な人は食品で十分抗酸化できるのでしょう。

「末期のがん患者さんに抗酸化食品云々いっても始まらない。私の制がん剤は活性酸素と結びついて悪さをしている過酸化脂質を唯一除去する。生薬も症状などに合わせて種類があり、それとサンドバスの入浴療法、点滴などを組み合わせて治療にあたります。そうするとがんセンターなどで余命3ヶ月と言われた末期の患者さんが10人來られたら、2、3人はかなり長期延命されます。あと3人はやはり3ヶ月で亡くなります。ほかの4、5人は半年から1、2、3年と苦しまずに生きて、亡くなられます。ほとんどのがんは決して治らない。そのことを認識してほしい。でも、私の治療

法は、抗がん剤の副作用で苦しんで亡くなっていくよりは長く延命し、かつ苦しめない人間らしい生活を送れる、ということです」

先生が四半世紀に渡って研究してきた制がん剤は年と共に進化を続け、2012年には権威のある国際癌学会にも認められ、その臨床効果が発表されました。丹羽療法にはエビデンスがないと言われたこともありましたが、この癌学会の発表は世界中の医学界に「がん延命効果が世界で一番」と認められた瞬間でした。

私たちは約20年前から先生の診療所にお邪魔して取材を行ってきました。主に新横浜と大宮の診療所でした。どちらも北と西の新幹線の主要ターミナルから歩いて2、3分という便利な

立地です。遠くからいらっしゃる患者さんの負担を少しでも減らしたいという先生の希望でした。初期の頃は、毎回診察前に講演を行っていたそうです。アトピーやがん、膠原病が発症するメカニズムや、抗がん剤や化学薬品の怖さ、先生の開発している生薬のこと、息子さんのことなど、話し始めると1時間、2時間はあつという間。その後から診察をしていたので、時には新幹線の最終に間に合わない

患者さんが現れたそうです。以来、そういう患者さんを優先に診察したりしていました。後に講演は映像に撮って、待合室で流していたそうです。その後、先生の本が相次いで出版され、本を読んでいらっしゃる方も増えたそうです。

いずれにしても先生は、常日頃、丹羽療法の本質を患者さん

やご家族に理解してもらわないと、治療につながるにおっしゃっていました。待合室で待っていると、先生の怒鳴り声が聞こえてくることもありました。

「何度言ったら分かるんだ！ あんたのがんは抗がん剤では治らないんだから！ 新薬？ 副作用が少ない抗がん剤!? そんなもんがんには効かん！ 新薬だから無料？ モルモット代わりにされるんじゃない！」

かと思えば、7、8年前、余命半年といわれた末期の肝臓がんの患者さんがいました。土気色をして、今にも倒れそうな弱々しさでした。

「先生、僕は病院の先生から3クール目の抗がん剤を勧められたんですが、もう、あんな苦しいのはいいです。どうせ死ぬんだから、楽に死にたいんです」

すると丹羽先生は患者さんの両手を包み込むように握って、やさしく話し始めました。

「そうか、しんどかったやろな。だるいやろ？ 大丈夫。私が楽にさせてやるから。楽とは殺すのとはちがうぞ(笑)。今はなんにも食べれないやろうけど、2週間で好きなもの食べられるようにしてやる。薬出すからそれを欠かさず飲んで、しばらくは毎月通いなさい」

消息を知る限りその患者さんは、欠かさず丹羽先生の生薬を服用し、昨年(2021年)もご健在でした。余命3ヶ月の方が10年近くご健在なのです。

また、土佐清水病院では、がん患者さんだけでなく多くのアトピーの患者さんが入院されていました。みなさん、きちんとした食事療法と、先生の生薬、塗り薬などですっかり良くなっ

て退院するのですが、元の生活に戻ると再発する人もいました。排気ガスがなく、空気がきれいな土佐清水は、療養にうってつけの土地です。そうすると先生は、舞い戻ってきた患者さんやアトピーのせいで仕事につけない患者さんをスタッフとして雇い入れたりしていました。

私たちは、とにかく患者さんのことだけを親身になって考えていた姿ばかりが目に見えてきました。スタッフがコンビニで買ってきたお豆腐とおにぎりを診察の合間にとる姿。毎回全国を移動しているのに、旅行鞆は持たず、スーパールの袋や、患者さんから差し入れていただいたお菓子の袋にカルテや書きかけの論文を詰め込んで持ち歩いていた姿。常泊のホテルに着替えなどを置いてもらい、クリーニングして着回していたそうです。

優しく柔和な笑顔と「そうかそうかよかったな」という優しい声が忘れられません。

先生、天国の息子さんに、

「剛士、お父ちゃんは、苦しんで亡くなっていくがん患者さんを、ひとりでも多く救えるようにがんばってきたぞ」

と話している、そう願わずにはいられません。

丹羽先生、さようなら。そしてありがとうございました。

文・藤沢映子(医療ライター)

※注1 好中球とは

白血球の中の顆粒球の一種で、白血球全体の約45%〜75%を占め、細菌や真菌感染から体を守る強い防御機構となっており、(国立がん研究センターがん情報サービスHPより)

※参考文献(すべて著者は丹羽 靱負/医学博士)

『白血病の息子が教えてくれた 医者的心』(草思社)

『がん治療 究極の選択』(講談社)

『奇跡のアトピー治療』(KKベストセラーズ)

『国際がん学会が認めた、延命効果世界一の丹羽がん療法』(徳間書店)

SOD様作用食品 体験者の声をお聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川 1-15-2 B棟2802

日本SOD研究会 宮城宛
TEL 03-5787-3498

までご一報下さい。

当研究会の許可なく、すべてのテキスト、画像等の転載、複製、転用を固く禁じます。また、まとめサイト、ブログ等への引用を厳禁いたします。

◆丹羽療法の診察をご希望の方は、ご紹介、ご予約いたします。

(自由診療となります)

※現在、診察は新型コロナウイルス感染症対策の為、お休みになることもあります。予めご了承ください。

丹羽メディカル研究所

☎ 0120(731)175

●SOD様作用食品とは●

丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されません。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをきっかけにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの。私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐丹羽クリニック院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある